

教育学部・教育学研究科FD報告書

1章 授業アンケート回答の分析

2章 2017年度教育学部授業公開報告

3章 教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウム

4章 学生FDサミット2017夏 —金沢星稜大学—

5章 2017年度教育学研究科教育改善のための調査

1章 授業アンケート回答の分析

1. 授業アンケートの回収状況

平成29年度の授業アンケートは、前期に学部の授業として開講されている科目について、非常勤講師・特任教員・長期研修・長期休暇中の教員を除き、担当教員1名につき1科目を実施してもらった。実施期間は平成29年7月6日（木）～7月27日（木）で、アンケートの回収を7月28日（金）に締め切った。

その結果、前期の授業担当者81名中、授業アンケートを実施した教員は53名で、53科目（オムニバス授業を含む）の授業アンケートが回収された。昨年度の授業アンケート科目数58科目より5科目減少し、授業アンケートを実施した教員の比率は60.9%であった。これは昨年度の実施率65.6%と比較すると4.7ポイント減少している。今後も引き続き実施率を高めていく必要がある。

2. 授業アンケートの質問項目

授業アンケートの質問項目は、昨年度の授業アンケートを引き続いて使用した。具体的な質問項目を次項の表1で示す。それぞれの質問項目について、4件法（4：そう思う、3：だいたいそう思う、2：あまりそう思わない、1：そうは思わない）で受講生に回答してもらった。なお、今年度も授業アンケートは紙媒体で実施した。

3. 授業アンケートの回答の分析

授業アンケート回答の結果について、全科目の平均値を表1に示す。参考までに平成27、28年度の結果もあわせ掲載する。

【表1】授業アンケート全科目平均値（平成27年度～平成29年度）

質問項目		H29度 平均	H28度 平均	H27度 平均
Q1	授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか。	3.66	3.76	3.54
Q2	授業の進度は適切でしたか。	3.73	3.77	3.56
Q3	授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠でしたか。	2.99	3.09	2.92
Q4	予習や復習をしましたか。	2.73	2.76	2.54
Q5	授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか。	3.43	3.43	3.07
Q6	授業中質問や発言をしましたか。	3.04	3.03	2.63
Q7	授業内容は理解できましたか。	3.5	3.51	3.38
Q8	授業はあなたの知的好奇心を刺激しましたか。	3.55	3.59	3.42
Q9	教師の話し方は明瞭で聞きとりやすいものでしたか。	3.73	3.72	3.58
Q10	教師の説明の仕方は分かりやすかったですか。	3.68	3.7	3.59
Q11	資料（板書、プロジェクター、配布資料等）の内容は明瞭に見てとることができましたか。	3.63	3.66	3.47
Q12	授業は時間通りに行われましたか。	3.72	3.74	3.55
Q13	オフィスアワーを活用しましたか。	2.00	2.04	1.87
Q14	授業に対する教師の熱意を感じましたか。	3.69	3.74	3.61

平成28年度と比較すると全体的にやや平均値が下がっているものの、平成27年度と比較すると、全科目で平

成 27 年度を上回っている。また、Q5「授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか」や Q6「授業中質問や発言をしましたか」は平成 28 年度と比較すると現状維持かやや上回っている。授業中の発言や質問しやすい雰囲気づくりは、アクティブラーニングの実践や学生の主体的な学びを促すためにも不可欠であるが、引き続き教員の工夫が継続されているとみてよいだろう。

今年度の平均値の上位 3 項目と下位 3 項目を以下に示す。

上位 3 項目		下位 3 項目	
項目	平均値	項目	平均値
Q2 授業の進度は適切でしたか	3.73	Q13 オフィスアワーを活用しましたか	2.00
Q9 教師の話し方は明瞭で聞きとりやすいものでしたか	3.73	Q4 予習や復習をしましたか	2.73
Q12 授業は時間通りに行われましたか	3.72	Q3 授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠でしたか	2.99
Q14 授業に対する教師の熱意を感じましたか	3.69		

平均値の上位には、昨年度と同様に Q2「授業の進度は適切でしたか」や Q12「授業は時間通りに行われましたか」が上がっている。また、今年度は Q9「教師の話し方は明瞭で聞きとりやすいものでしたか」や Q14「授業に対する教師の熱意を感じましたか」も上位に上がっている。

しかし、Q13「オフィスアワーを活用しましたか」、Q4「予習や復習をしましたか」、Q3「授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠でしたか」の 3 問については、他の項目が平均 3.0 以上を示しているのに対し、平均値が 3.0 未満を示している。また、この傾向は過去 2 年間もほぼ同様である。オフィスアワーの活用については、オフィスアワー以外での個別の面談や指導も考えられることや、Q5 のように授業中に発言や質問ができる可能性もあるため、オフィスアワーの活用が低い理由を自由記述などで調査する必要がある。あるいは、今後、質問内容を変更することも考えられる。予習・復習については、大学教育全体として、学習時間の確保が問題となっているため、学生の学習時間に関するより詳しい調査を行う必要があるだろう。

2 章 2017 年度教育学部授業公開報告

1. 授業公開の実施計画

(1) 授業公開の目的と枠組み

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針にある FD の定義には「大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上をはかるとともに、学生支援を行う自発的な取組」とあり、各教員が自発的に自身の教育方法を向上・改善させて行くことが求められている。また、本学部の教育改善委員会においても「教員同士が相互に授業を公開・参観することにより、各教員が授業方法・授業運営の改善をはかり、教育の質的向上を目指す」ことを目的として設定し、今年度も授業公開・参観を実施した。

(2) 授業公開の実施手順

今年度は、より多くの教員に気軽に授業公開・参観に参加してもらうために、昨年度までの実施手順の見直しを行った。具体的には、授業の性質上、進行上の都合などにより授業公開できない科目の調査を行い、それ以外の科目に関しては授業者へ事前連絡をしなくても参観することができるようにした。

(3) 授業公開不可科目調査

事前に教授会で実施手順について説明したのちに、前期授業公開については 6 月 28 日（水）～7 月 5 日（水）、後期授業公開については 12 月 1 日（金）～7 日（木）の期間で授業公開できない科目の調査を行った。調査内容は、①公開できない授業科目名（曜日・時限・科目名）、②参観者を受け入れられない理由の 2 点であり、各自で教育改善委員会の担当者にメールで連絡をしてもらった。調査の結果、前期授業公開においては 7 科目、後期授業公開においては 9 科目が授業公開不可科目として届けられた。授業を公開できない理由としては、「受講生が 1 名であり、個別指導形式の授業を行っているため」や「学外研修を含むため」、「実技系科目で教室の性質上、参加者を受け入れることが難しいため」といった事情が挙げられた。なお、すべての教員が 1 つ以上の科目で授業を公開した。

(4) 授業公開不可科目一覧と授業参観報告書書式の提示

授業公開不可科目調査の結果と授業参観報告書の書式を全教員宛にメール添付で送信するとともに、授業参観報告書に関しては紙媒体で全教員に配布した。授業参観をした教員は、授業参観報告書をメール添付あるいは紙媒体で提出することとした。

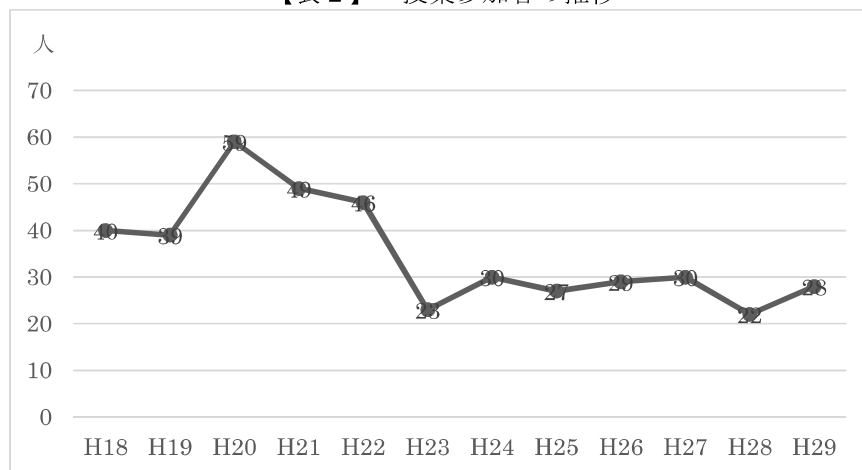
(5) 授業公開および授業参観の実施

前期は 7 月 10 日（月）～21 日（金）、後期は 12 月 11 日（月）～22 日（金）に実施した。そして、授業参観報告書は前期が 7 月 24 日（月）、後期が 12 月 25 日（月）までに提出してもらい、教育改善委員会が集約した。

2. 授業参観の実施状況

全専任教員 97 名（長期出張、産休等を除く）中、前期は 19 名（前年度 14 名）、後期は 9 名（前年度 8 名）から授業参観報告書が提出された。同じ専修・コースの教員が行う授業での参観は前期が 10 件、後期が 3 件、異なる専修・コースの教員が行う授業への参観は前期が 9 件、後期が 6 件であり、異なる専修・コースの教員の授業を参観する傾向が見られた。

【表 2】 授業参加者の推移



3. 授業参観報告書における記述（一部を抜粋）

（1）授業方法に関して

- ・「毎週、宿題を課す」、「学生がノートを取る時間的余裕に配慮している」、「授業時間中も『二十答法』を用いて、授業への主体的な参加を促している」といった工夫が見られた。
- ・パワーポイントで進められていたが、パワーポイントの文字部分は紙媒体でも配布されていた。ただし、重要な部分や補足は空欄で、授業者の話を聞き、スライドをきちんと見なければ埋められないようになっており、授業者の配布資料に対する工夫が感じられた。
- ・学生の発表内容を授業者が事前に確認しており、発表者へのコメントの際に他の学生の傾向を踏まえた指導がなされていた。
- ・学生に対する本時間の学習目標、ねらい等の説明が適切に行われていた。

（2）授業内容に関して

- ・科学としての心理学を扱い、発達過程に見られる様々な現象に対して、可能な限り整合的かつ検証可能な説明を加えることに徹底していた。
- ・島津久光の紀行詩を学生が調べて発表するという形式の授業で、学生が漢詩を分訳して発表し、授業者が要所で指導・助言を行っていたが、授業者のコメントが学生の興味を喚起させるものであると思われた。さらに、当該の漢詩は久光が霧島温泉を訪れた時のものであり、学生にとってはなじみ深いものであった。
- ・要所で小中学校での指導場面や最近の報道内容と関連付けた説明がなされていた。

4. 授業公開に関するまとめ

教育学部の授業公開は平成 18 年度から開始され、今年度が 12 回目にあたる。平成 23 年度から授業参観の数は 30 件あたりにとどまっており、参観実施率は低いままである（【表 2】を参照）。このような現状を変えるべく今年度は授業参観に際し、授業参観不可科目以外は参観可能としたうえで、授業者に対して事前の連絡はしなくても参観可能な手順へと変更したが、授業参観数は昨年に比べて微増したにすぎない。すなわち、授業参観数が低い原因は、実施手順にあるのではないことが明らかとなった。

3章 教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウム

1. FDシンポジウムの目的

大学内の教育活動の実態について、学生が主導して調査・報告をおこない、学生の視点から改善策を提案することが主な目的である。また、今後の継続的な活動のための記録を蓄積していき、自在に活用できるようにすることも重要な目的である。

2. FDシンポジウムのテーマ

テーマの決定にあたっては、学生FD委員が日隈委員と議論しつつ学生にアンケート調査をおこない、下記の5

テーマに決定した。従来は学生、教員が協力しても実現困難なテーマ(施設の増築や、単位制度の変更など国の施策が必要なもの)を取り上げることもあったが、今回は実現可能なテーマに絞って提案をおこなった。テーマ1、2に関しては授業内容改善の観点から、テーマ3～5は学生生活をより良くする観点から提案されたものである。

テーマ

- 1、学生主体の活動を取り入れた講義について
- 2、シラバス通りの授業について
- 3、抽選科目の電子化について
- 4、施設の老朽化について
- 5、トイレの改築について

3. スケジュール

日時：2017年12月12日(火)

会場：教育学部第一講義等204教室

受付：14:50～15:00(204教室前)

基調報告：15:00～15:30

- ・本FD活動の意義(学生FD委員会委員長：渡邊堯之)
- ・全国学生FDサミットでの取り組み(サミット参加者：藤井ハルネ、吉田朱理)
- ・学生アンケート分析から見えたこと(学生FD委員会委員長：渡邊堯之)

グループ討論：15:35～16:00

全体報告・討論会：16:00～16:20

教務委員長による総評(坂本育生教授)及び閉会の挨拶(斎藤美保子FD委員会委員長)：16:20～16:30

4. 基調報告

以前は教員による基調報告がおこなわれていたが、今回は学生FD委員長による基調報告がおこなわれ、学生主導のシンポジウムということが強く感じられた。まず、FDの定義を説明し聴衆に共有させることで今後の議論の円滑化が図られた。続いて全国FDシンポジウムに参加した学生からの報告がおこなわれた(該当報告参照)。最後に、学生アンケート分析の結果を統合・考察した結果を学生FD委員長が解説し、以降のグループ別討論会で取り上げる議題に関する背景説明をおこなった。学生アンケートの結果を分析した結果、上記のFDシンポジウムのテーマが設定された経緯を解説した。

5. グループ別討論会

グループ別に討論するために学生参加者をA～Cの3グループに分けた。各グループには教員2名も加わり議論をおこなった。

以下、テーマごとの各グループの意見を掲載する。

1、学生主体の活動を取り入れた講義について

Aグループ：全ての講義で取り入れるのは現実的ではないので、共通教育との連携や教職必須科目以外で試験的に実地してはどうか。

Bグループ：実践型の講義に関しては知識を教えるのみでなくフレキシブルな対応が必要である。自分で考える授業をしてみてもどうか。

Cグループ：そもそも何を持って主体的とするかから考える必要あり。自主的な学習との違いは何か。

2、シラバス通りの授業について

Aグループ：小中学校の授業でおこなう「今日のめあて」のような設定を講義開始時に示すのが良いのではないかと。成績評価の可視化が重要である。

Bグループ：シラバスとは学生と教員との契約書という側面を持つ。どちらか一方の都合で破棄することはできないので、変更の際は両方で話し合う必要がある。

Cグループ：講義の進行状況や受講生の状況によってシラバスの内容を変更すべき時もあるはず。シラバス通りにおこなう必要性を教員側に訴えることも必要かも知れない。

3、抽選科目の電子化について

3グループともに必要であるという意見になった。提出日の提出時間にその場にはいないといけないというのは学生、教員双方にとってデメリットである。

4、施設の老朽化について

5、トイレの改築について

3グループともに、改築に関しては教員と学生だけで何とかなるものではなくそのための予算を獲得しなければならないという意見になった。

6. 全体報告会

グループ別の意見が発表され、意見の交換がなされた。各グループの意見に対して異論等は提出されず概ね全ての問題点を参加学生たちが共有しているようだった。特に「抽選科目の電子化」については学生・教員ともに多くの参加者が賛成を表明した。「学生主体の活動を取り入れた講義」に関しては、何を持って学生主体なのかといった定義を巡る議論などが提出され学生の関心の高さが伺われた。報告会の最後には坂本教務委員長により全体総括がおこなわれた。

資料写真(シンポジウムの様子)



写真1 基調講演の様子



写真2 学生FDサミットの報告



写真3 全体報告会の様子



写真4 坂本教務委員長による総括

4章 学生FDサミット2017夏 in 金沢星稜大学

「みんなで考える理想の授業～温故知新 学生FDの今昔から～」

1. 学生FDサミットに参加した教員の報告

日隈正守

2017年8月31日(木)～9月1日(金)の2日間金沢星稜大学において「学生FDサミット 2017夏 みんなで考える理想の授業～温故知新 学生FDの今昔から～」が開催された。学生FDサミットは、2009年夏京都で26大学98人が参加して第1回目が開催された。今年は第15回目が金沢星稜大学で開催され、37大学237人が参加した。私は、鹿児島大学教育学系国語科3年藤井ハルネさんや教育学系心理科2年吉田朱理さんと参加した。

今年の学生FDサミット開催校である金沢星稜大学は、学長以下大学首脳部がFD活動則ち大学改善、授業改善活動に積極的に取り組んでいることが印象的であった。また学生FDサミットでは、学生、大学職員や教員が大学を改善していくために対等の立場で真摯な議論が展開した。相手の主張を否定せず、自分の意見は明瞭に主張している姿が印象的だった。学生FDサミットに参加した学生は、各大学の1年生～4年生であったが大学入学後半年もたない1年生が堂々と自分の意見を主張している姿を見て驚嘆した。

1日目の8月31日(木)の日程は、12:00から受付が開始され、13:00から1時間開会行事が行われた。金沢星稜大学経済学部経済学科2年・学生FDサミット2017夏実行委員長南出真旺氏が開会宣言をし、今年の学生FDサミット開催校である金沢星稜大学学長、学生FDを始めた木野茂氏が挨拶、日程説明等が行われた。



写真1 開会式の様子



写真2 講演会の様子

14:00から「～大学を学びながら遊ぼう～」というテーマで福井大学研究推進課研究協力係長鎌田康裕氏による講演が行われた。鎌田氏は、金沢大学の学生時代教養的科目の中の総合科目「生と死を見つめて」という授業を企画した経験が有る。講演の中では、授業「生と死を見つめて」を企画したきっかけや授業を企画してから実際開講される迄の経緯、開講後の諸課題や大学改善のための諸提言等が扱われた。

15:20～17:45は、各班に分かれて大学における授業のシラバスを作成する作業を行った。学生FDサミット全参加者が学生、大学の職員、教員により構成される30班に分かれて、自分達が受けてみたい授業のシラバスを翌日までに作成することが課題であった。大学の授業に関する情報やたたき台となるシラバスが配布され、必要であれば金沢星稜大学附属図書館の利用も認められた。

FD大学シラバス

科目名	金沢・星稜 入門						
副題	～金沢と自校を知ろう～	配当年次	1年次	単位数	2	必修・選択	必修
授業意図	金沢星稜大学の約9割の学生は北陸三県出身で、その中でも約30%が金沢出身である。多数の金沢以外出身者は、金沢のことを知らないと推察できるが、金沢出身者でもどこまで金沢のことを理解しているだろうか？ 縁があって、ここ金沢の地で勉学を励むのならば、北陸新幹線の影響で全国的に注目を集めている金沢を、より多くの学生が理解をするよう様々な観点から考察する。 同時に、星稜の歴史や金沢星稜大学の取組を理解することで愛校心を醸成し、また、現在の日本の大学の置かれている現状をより深く理解することで、これからの大学生活を有為義に送るための道標を示す。						
科目の具体目標	“金沢”、“星稜”、“大学”をテーマに、講義とグループディスカッションを通じ、それぞれの理解を深める。最終到達目標は、第三者に“金沢”並びに“金沢星稜大学”を紹介できるような能力を身につけ、一人ひとりが広告塔となることである。						
履修条件	必修科目のため特になし						
授業計画表							
回	予習・復習	テーマ	目標				
第1回	特になし	講義概要の説明、アイスブレイク	講義の全体像を知る				
第2回	文部科学省のHPを事前確認	大学を知る1 「文科省の施策について」	現在の高等教育の現状を知る				
第3回	ディスカッション準備	グループディスカッション	第2回講義を踏まえて、グループディスカッションを行い、情報共有を図る。				
第4回	事前配付資料の精読	大学を知る2 「学生の経済問題について」	日本における学生の経済問題を理解する				
第5回	ディスカッション準備	グループディスカッション	第4回講義を踏まえて、グループディスカッションを行い、情報共有を図る。				
第6回	大学案内を事前確認	星稜を知る1 「稲置学園の歴史について」	稲置学園(星稜)の歴史を知る				
第7回	ディスカッション準備	グループディスカッション	幼稚園・高校・大学の連携についてをテーマとし、情報共有を図る。				
第8回	事前配付資料の精読	星稜を知る2 「大学の取り組みについて」	就職、SJP及びGDPについて情報共有を図る				
第9回	ディスカッション準備	グループディスカッション	第8回講義を踏まえて、グループディスカッションを行い、情報共有を図る。				
第10回	金沢HP確認	金沢を知る1 「金沢の歴史について」	金沢市観光課から講師を招き、金沢の今と昔を知る。				
第11回	事前配付資料の精読	金沢を知る2 「北陸新幹線と観光」	石川県から講師を招き、北陸新幹線がもたらす経済効果を知る。				
第12回	ディスカッション準備	グループディスカッション	第10・11回講義を踏まえて、グループディスカッションを行い、情報共有を図る。				
第13回	事前配付資料の精読	金沢を知る3 「学生のまち金沢について」	金沢市市民協働課から講師を招き、金沢と学生に関わる法令や現状を理解する				
第14回	ディスカッション準備	グループディスカッション	第13回講義を踏まえて、グループディスカッションを行い、情報共有を図る。				
第15回	特になし	金沢視察	現地実習で金沢を再度理解する。				
成績評価 (方法・割合)	「大学」「星稜」「金沢」それぞれのテーマ終了後のレポート 40% グループディスカッション評価20% 定期試験40%						
留意事項	適宜グループディスカッションを実施するため、止むをえず講義を欠席する場合には、前回講義配付資料を〇〇研究室まで取りに来てください						

私は10班に参加した。学生達は日本国内の様々な地域から参加しているために、学生FDサミットが開催されている金沢市或いは石川県を素材とした授業を作ることになった。教員と学生双方向的な授業にするためにグループディスカッション、学生達が実際現場に行き目で見て学ぶフィルードワークを取り入れて作ることになった。この時私は、学生達から双方向的授業について質問をされた。この時私は、共通教育「鹿児島探訪一歴史」や「初年次セミナーⅠ、Ⅱ」を担当して経験したことを紹介した。私が学生達に助言できたのも偶々共通教育を経験していたからであり、共通教育を経験して良かったと痛感した。

17:45に1日目のシラバス作成時間は終了し、場所を移動して大学食堂2階で18:00から懇親会が行われた。立食の形式で、他大学の教職員や学生達と楽しく歓談することができた。鹿児島大学教育学系から参加した藤井さんや吉田さんも同じ班の学生達等と楽しそうに歓談していたので、私も懇親会に参加して良かったと思った。私も開催校である金沢星稜大学の先生に学生FDサミット開催を決意した理由や開催に至るまでの経緯、学生FD活動等を伺った。また学生FDサミットを初めて行った木野茂氏に挨拶したところ、学生FDサミットに参加し続けている鹿児島大学教育学系の姿勢を評価して頂いて光栄に感じた。この時に鹿児島大学教育学系で行っている

FD 活動を紹介することや学生 FD サミットを開催することを求められた。教育学系で行っている FD 活動を紹介することは可能であると思うが(但し日本全国に紹介するとなると学系の FD 活動をより充実させていくことが必要であると思われるが)、学生 FD サミットを開催することは今後の課題であると思った。確かに学生 FD サミットを開催することが出来れば多くの貴重な経験をする事が出来て数多くの貴重な情報を得ることが出来ると思う。しかし学生 FD サミットを開催するためには学部 FD 活動がより一層盛んになっている必要があると思うし、大学本部や学系執行部が相当の熱意を持たないと中々実現することではないと思う。学生 FD サミット開催は、将来への課題としたいと思う。



写真3 懇親会の様子①



写真4 懇親会の様子②

19:30 過ぎに懇親会は終了し、1 日目の日程は終了した。

2 日目の 9 月 1 日(金)の日程は、9:00 から受付で、9:30 から「学生 FD サミット 2017 夏 統一テスト」が 25 分で行われた。1 日目の開会行事や講演等で放されたことや FD に関すること、大学における授業時間数と単位との関係、シラバスに関する基本的な理解、自大学理解や学生 FD サミットに関する理解を問う出題であった。数十年ぶりで試験を受ける立場になり大いに戸惑った。目を白黒させながら解答した。テスト終了、答案回収後答え合わせがあり、FD に関する理解を一層深めた。

10:30~14:00 の間昼食をはさんで昨日に引き続きシラバスを作成した。本日は班のシラバスを 14:00 までに作成し終えなければならないので緊張したが、昨日ある程度方向性は出ていたので割と順調に作業は進んでいった。我々 10 班のシラバスは 13:40 頃には完成した。



写真5 シラバス作成の様子



写真6 出来あがったシラバス

14:15~15:05 の間、4 会場に分かれて 30 班が作成したシラバスが報告された。何れの班も班の学生達が日本各地から参加しているので、学生 FD サミットの開催地である金沢市や石川県を素材としたフィールドワークやグループディスカッションを行い歴史、地理、文化等を扱う授業のシラバスが報告された。各班の様々な工夫を示した興味ある報告会であり、とても有意義であった。



写真7 シラバス報告会の様子①



写真8 シラバス報告会の様子②

15:15～16:00 が閉会行事であったが、この日の内に鹿児島市に戻るためには班報告会終了後金沢星稜大学から金沢空港に移動しなければ間に合わない状態であった。故に閉会行事は欠席し、空港へ移動し飛行機を乗り継ぎ鹿児島空港へ戻った。

今回の学生FDサミットに参加して、大学におけるFD活動の重要性について認識を新たにされた。FD活動は、単に授業改善に留まるものではなく、大学自体を大学を構成する学生、職員、教員にとりより良いものにしていくための活動であることを知りしみじみと考えさせられた。学生、職員、教員が高等教育機関としての大学をより良くしていくために対等の立場で考えて行くことの重要性と難しさを痛切に感じた。私も自分なりに良いと思う方法で学生教育にあたっている積りであった。双方向的授業を行うことは容易ではないが、その方法を考えることは重要であると思う。また学生、職員、教員が立場は異なるものの対等により良い大学を目指していくためには、一人よがりな態度、気持ちを捨てて自らの責任を果たすことが前提条件であると思う。今回学生FDサミット2017夏に参加したことを踏まえて、今後鹿児島大学教育学系のあるべきFD活動の在り方を考えていきたい。

2. 学生FDサミットに参加した学生（2名）の感想

FDサミット

心理学専修2年 吉田朱理

2017年のFDサミットは金沢星稜大学で行われ、鹿児島大学教育学部代表として全国学生FDサミットに参加した。FD委員の仕事は「大学での学習環境の改善」ということは聞いていたが、それ以外のことは何も知らない状態であった。実際、私自身、大学生活を送る中で今まで一度も「FD」というワードを大学で耳にしたことがなかった。そのような状態でサミットに行き、まず初めに感じたことは、鹿児島大学ではFDの活動は何も行われておらず、形だけ存在しているということだった。国公立・私立、4年制・2年制といった様々な大学が集まり、それぞれの大学で行われている活動について話を伺った。大学とは別にサークルのような団体として活動している大学、大学の組織の一つとして活動している大学、FDの活動によって作られた授業で単位ができる大学とそうではない大学。大学によってFD活動やFD活動の扱いは異なるが、どの大学も積極的に活動が行われていた。一方、鹿児島大学は、FD委員による大学生活・授業の実態調査が行われているが、それが改善のために利用されているとは言い難いというのが実態である。

FD活動についてほとんどわからない状態でサミットに参加したが、収穫はたくさんあった。まず、FD活動というのは、学生が受動的に授業を受けるのではなく、主体的に、能動的に「学ぶ」ための活動を行うというものだ。「学ぶ」のは授業によってであるが、学ぶ内容は学部学科専門ことだけでない。マナーなど人として社会人として身につけておくべきことであったり、その地域の特色を生かした内容であったりと様々である。大切なことは、学生が学びたいと思うことを授業としてつくり、実際に学ぶということだ。その授業をつくるために、学生が教授や外部の講師、地域の方々と協議・協力していかなければならない。「主体的」「能動的」とは、学びたいと思うものを学ぶために、自ら行動を起こしたり働きかけたりするというということであると考えられる。授業をつくるためには、自分達で概要や講師などを考えたり依頼をしたりしなければならない。FD活動の核となる「主体的、能動的な学び」という考えについてまとめると、学ぶために行動を起こすということが、主体的、能動的な学びに繋がっていくと言えるだろう。

ここで、鹿児島大学教育学部について考えてみる。FD活動が鹿児島大学教育学部で行われていないということの最も大きな原因として考えられるのは、FD活動が知られていないということだ。私自身もサミットに参加するまでFD活動というものがあるということ自体知らなかった。このような状況を踏まえやるべきことは、FDという組織とどのような活動を行なっているのかということを知ってもらうこと、さらに各専修で委員を決め(あるいは有志の学生)、学部全体での委員の活動を増やすということだ。これを行うにあたって、各専修の指導教員

や教務係・学生係との協力も必要になると考えられる。

また、教育学部は教員免許を取得するためにカリキュラムがガッチリと組まれているということだ。このカリキュラムが組まれている状況の中で新たな授業を組むというのは現実的に厳しいことだ。では鹿児島大学教育学部ではどのようにFD活動を進めていくのが良いのだろうか。FD活動に積極的な学生と考えたところ、教育学部のFD委員が考案した授業を共通教育で取り入れる、あるいは単位にならずとも研修会・講演会のようなものとして授業をつくるということが挙げられた。

以上2つの課題を挙げたが、これらを解決するのは中々難しい。まずは、FDの活動に積極的な学生と、少ないながらも学生や教授、学部への働きかけをしていかなければならないと感じている。来年度のFD活動が今年よりも良いものになるよう、有志の学生と良い方法を考えていきたい。

学生FDサミットに参加した感想

国語専修3年 藤井ハルネ

① 学生FDサミットに参加して学んだこと、視野が広がったこと

私は、FDサミットに参加するまで、ただ何となく大学の講義を受けていた。今回、FDサミットに参加し、自分の視野が大きく広がり、講義を受ける姿勢も変わったような気がする。

FDサミットでは、グループごとに分かれて自分たちの考える理想の授業のシラバスを作った。私にとっては、もちろん初めての経験であった。しかし、他大学では、学生FD自らが作った授業を実践しているところもあり、知識と経験が豊富な他大学生を目の当たりにした。シラバスを作っていく中で、教員による一方的な講義形式の授業を受動的に受けるのではなく、能動的に参加していくことで、様々な能力が鍛えられ、また、授業をただ何となく受けるのではなく、「これをもっと深く学びたい」「授業のこのような点を変えたい」など学生自身の意欲の喚起にもつながるということを学んだ。

鹿児島大学には、学生自らが作った授業というものはないが、受動的ではなく、能動的に授業に参加することによって、今よりももっと学べることは増えていくと感じた。

② 今回学んだことを今後鹿児島大学でどのように生かすことができるのか

教育学部は、教職課程があり、学生が考えた授業を実践することは難しいだろう。しかし、共通教育科目として学生が考えた授業を実践しても良いと思う。

また、現在のFD活動としては、講義や施設改善に関するアンケート調査やイベント運営にとどまってしまっている。本来のFD活動の目的は、授業方法や内容を改善するものである。その目的を見失わないために、FD委員一人ひとり、鹿児島大学生全員にその目的が浸透するように働きかけなければならない。

③ 全体を通しての感想

鹿児島大学のFD活動は他大学に比べ、活発ではなく遅れを取ってしまっているという現実を突きつけられた。しかし、その中でも他大学の学生、教員、職員との交流によって、他大学の現状を知ることができた。次は、胸を張って鹿児島大学がFDサミットに参加できるようにFD活動を大学全体で盛り上げていかなければならないと思う。

5章 平成29年度鹿児島大学大学院教育学研究科教育改善のための調査

1. はじめに

鹿児島大学大学院教育学研究科では、毎年大学院生を対象とした教育改善のために調査を行ってきた。本年度から鹿児島大学大学院教育学研究科は、従来の修士課程である教育実践総合専攻と教職大学院である学校教育実践高度化専攻(専門職学位課程)の2専攻が併存することになった。本年度は、鹿児島大学大学院教育学研究科では、教育実践総合専攻において教育改善の調査をおこなった。本章はその結果報告と考察である。

大学院生からの回答の中には、毎年記載される要望事項がある。同じ要望事項が毎年記載されるということは、十分に改善されていない現状が見られる。こうした要望事項から、本専攻が今後取り組むべき課題が明らかとなる。

今回の調査結果を分析し、今後の本専攻の教育改善に役立てていきたい。

2. 調査の実施方法

平成 29 年度の教育改善のための調査を以下の方法で実施した。

- (1) 調査実施時期 2017 年 7 月
- (2) 本専攻 1・2 年次生を対象とした。
- (3) 方法:2017 年 7 月本専攻 1・2 年生に調査用紙を配布し、7 月 31 日までに教務係に提出してもらった。本専攻 1 年生 5 名、2 年生 8 名計 13 名から回答を得た。回答を得た数があまりに少ないことは大いに問題である。今後回答数を増やす方を検討していきたい。少ない回答数の中ではあるが、回答内容を紹介し考察してみたい。回答用紙は無記名であった。

3. 結果と考察

- (1) 質問項目 1:「研究科共通科目」、「コース共通科目」の授業についての意見

1) 回答結果

①満足している点とその理由

- ・色々な方々と交流できるので、刺激的な授業が多い。
- ・内容が充実している。
- ・様々な大学以上の質の勉強ができていて一人一人意識が高いので、いい影響を受けている。
- ・いろいろな分野の先生方の話をうかがうことができ、1 つの分野からの視点ではなく複数の分野からの視点でものごとをとらえるたのしさを感しました。
- ・充実して満足している。
- ・様々なコースの人達とディスカッションができる。
- ・幅広い視点で教育について考える機会が増えるので、理論的なこととともに、実践のことも考えることができる。視点が広がる。実践に生かしていけるような講義が多い。
- ・色々な先生から、コンパクトに講義が受けられるので、専門以外の視野が広がると思う。

②改善してほしい点とその理由

- ・現職の先生方の御意見を聞く機会があまりにも少ない。現職の先生の人数を増やしてほしい。
- ・6 限の授業が長引くことがありました。時間通りにおわっていただくと助かります。

2) 考察

研究科共通科目、コース共通科目については、授業内容について概ね評価する意見が多い。但し今年度から教育学研究科の中に学校教育実践高度化専攻が設置され、現職教員の多くは教職大学院に進学するようになった。教育実践総合専攻に入学する現職教員の数は激減している。教育学部から本専攻に進学した大学院生から現職教員の大学院生と触れあう機会があまりにも少ないという指摘は、上記のことが背景となっている。本学部から進学した大学院生と現職教員の大学院生とが触れ合えるようにするためには、現職教員に教科内容を専攻できる教育実践総合専攻に進学するように働きかけていくことや教育実践総合専攻の大学院生と現職教員が大半である教育実践高度化専攻の大学院生とが交流する機会を今後設定することを検討する必要があると考えられる。

また 6 限目の終了時間が遅くなることへの不満が出ている。授業を行う側は最終授業時間帯ということで、終了時間が幾らか遅くなるのかもしれないが、授業時間は守るように心していかなければならないと思う。

- (2) 質問項目 1:「学修コース専門科目」の授業についての意見

1) 回答結果

①満足している点とその理由

- ・1 対 1 の授業が多く、濃い内容の授業ができています。
- ・現職の先生との議論を通して学習できるため、ディスカッションが盛り上がる。
- ・大学以上の専門的知識を学べる点。
- ・授業が融通を効かせてくれる。ほとんど一人の講義のため。
- ・専門分野にちかいはなしなどをうかがえるのでたのしいです。ゼミの授業でも進学したからこそきける授業が多く、その点では進学してよかったと思っています。
- ・専門教科について時間数が足りている。
- ・高レベルの専門領域を学習できる。
- ・教科領域について、幅広く学ぶことができるとともに、深く学ぶことができ、深い学びが可能である。様々な物事を見るとき視点が増えた。
- ・教育学部においても、専門領域(教科教育)を高められる場として有難く感じている。
- ・先生方が講義をとりやすいように配慮して下さるので有難い。
- ・新たに評価方法を学べたり、新たな考え方を学ぶことができました。

②改善してほしい点とその理由

- ・学修コース別になると、人数が少ないため、多くの意見を聞くことができない。定員を増やしてほしい。
- ・在籍してない時点でも受講しやすい方法があると今後の教育活動に自信がもてる(現職 として)。

2) 考察

学習コース専門科目は、受講人数が少ないため融通が効いたり、教育効果が上がっている。概ね良好な評価が出ている半面、受講人数が少ないため多くの意見を聞くことができないという弊害がでている。学生定員を増やすのは難しいが、授業内容によっては受講者を増やす方を本専攻で検討することも必要かもしれない。指摘されている授業の分野はどういう分野の授業であるかを調べた上で改善の方策を検討すべきであると考えられる。

在籍していない時点でも受講しやすくする方策を考えることは、「社会に開かれた大学」を目指すために重要なことである。本研究科、本専攻の首脳部で今後検討して頂きたい。

(3) 質問項目 3: 研究・学習環境(設備・備品・消耗品等)についての意見

1) 回答結果

①満足している点とその理由

- ・実験器具等の設備が充実しており、実験しやすい。
- ・院生研究室には wifi がとどき、調べものをするのに便利な点。
- ・学内のネット環境は整っているため満足しています。
- ・院生室でしずかに勉強させてもらえる環境があり、とても充実しています。
- ・ネット環境を利用したレポート提出は、便利であった。
- ・(自分)自身が自由に使えるデスクが整備されているため、研究に専念できる。
- ・数多くの設備が備わっており、満足している。
- ・図書館のレファレンス支援(これがないと成り立たない実態です)
- ・常に集中できる環境(院生室など)があることには満足している。
- ・冷暖房が備えられている点もいい。
- ・研究法について先生と一緒に考えアドバイスをくれるので、とても勉強になります。

②改善してほしい点とその理由

- ・大学院生の部屋にパソコン等があれば、部屋自体がつかいやすくなると思う。
- ・院生研究室等で院生が共有して使える PC を設置して欲しい。理系棟 6 階まで wifi がとどかないので調べものがしづらい点。
- ・プリンタが欲しい。(家で印刷しているため、費用がかかる)。体育科棟にいますが耐震強度が低いと聞いているため不安です。
- ・図書館に辞典雑誌をいれてもらえるとうれしいです。
- ・音美棟の防音設備
- ・体育棟の老朽化は見過ごせない、7 月に起きた地震のことを考えると不安がある。
- ・院生室として利用しているレッグプレスを除去できたら幸いです。
- ・喫煙所を設けてほしい。
- ・土曜日・日曜日でも中央図書館に司書の方がいてもらえると更に有難いです。
- ・枚数制限があつていいので、院生にコピーカードを与えてほしい。(教授がいないとコピーできない)。
- ・文系棟の教室をもっと明るい蛍光灯にしてほしい(今の蛍光灯だと手元が暗いため不自由)。
- ・院生個人でもコピー機が使えるようになると有難い。

2) 考察

院生研究室にパソコン、プリンタ等の機器を備えて欲しいという要望や大学院生にもコピーが使えるようにしてほしいという希望がある。この他音美棟の防音設備や体育棟の老朽化対策、中央図書館の土曜日・日曜日の司書配置等の要望もある。経費が極めて厳しい昨今ではあるが、大学院生達の要望について本専攻や本学で検討して頂いて、対応が可能な部分については改善して欲しい。

(4) 研究成果の発表について

1) 回答結果

①口頭発表

- ・すでにした 2 名
- ・する予定である 10 名
- ・予定はない 1 名

ア)満足している点とその理由

- ・自分の全国での位置づけや研究する喜びをかんじました。
- ・担当教員の指導のもと、段階的に進めることができている。
- ・多くの人前で発表することにより、(自分)自身の研究を更に深めることができ、ありがたい機会であると考えられる。

イ)改善してほしい点とその理由

- ・県外の学会発表の際に旅費等の補助が少しでもあれば、より活発に参加できると思う。

②論文執筆

- ・すでにした 0 名
- ・する予定である 13 名
- ・予定はない 0 名

ア)満足している点とその理由

- ・多くの先行研究をよめている点。
- ・研究の仕方を講義で教えてもらっている点。
- ・準備期間は十分に足りている。
- ・指導教員の先生を含め関係者の方々にアドバイスを頂きながら指導を受けています。
- ・常に自分自身の研究と向き合っただけのため、非常にありがたく思っている。未熟な私のために一生懸命ご指導していただいている指導教官に感謝している。
- ・担当の先生より章毎に和やかな指導をいただいています。

イ)改善してほしい点とその理由

- ・資料が少ない。
- ・個人持ちの機材(パソコンなど)では、特殊な機能を必要とする作業が要求されるために、限界のある面もある。難しいと思うが、学内の貸し出し機材などがあると助かります。

③作品・演奏・競技等

- ・した0名
- ・する予定1名
- ・予定なし2名
- ・該当なし10名

ア)満足している点とその理由

- ・不備を感じていない。

イ)改善してほしい点とその理由

- ・特になし。

2) 考察

調査は、本専攻1・2年次生を対象として7月に実施した。この時点で2年次生の中には、口頭発表を既に行っている人がいた。また口頭発表や論文執筆を行う予定の院生がほとんどである。このことは院生の研究が着実に進んでいることを示している。大学院に入学したからには、口頭発表や論文執筆等は是非取り組んで欲しいことである。本専攻所属の院生は、上記の結果をみれば研究への意欲は高く、研究成果が期待できると考えられる。

平成29年度教育学研究科 教育改善のための質問紙

締切 ____月 ____日

教育学研究科では教育改善のため、大学院生への調査を実施します。下記の項目に自由回答していただき、回答ボックス(教務係設置)へ提出してください。

なお、番号には該当箇所に○をつけてください。

F1 ① 1年 ② 2年 F2 ① 男 ② 女

1. 「教育学共通科目」、「コース共通科目」の授業について意見を書いてください。

満足している点とその理由

改善してほしい点とその理由

2. 「学修コース専門科目」の授業について意見を書いてください。

満足している点とその理由

改善してほしい点とその理由

3. 研究・学習環境(設備・備品・消耗品等)について意見を書いてください。

満足している点とその理由

改善してほしい点とその理由

4. 研究成果の発表についてお尋ねします

(1) 口頭発表

① すでにした ② する予定である ③ 予定はない。

満足している点とその理由

改善してほしい点とその理由

(2) 論文執筆

① すでにした ② する予定である ③ 予定はない。

満足している点とその理由

改善してほしい点とその理由

(3) 作品・演奏・競技等

① すでにした ② する予定である ③ 予定はない ④ 該当しない

満足している点とその理由

改善してほしい点とその理由

ご協力ありがとうございました。教育学部教育改善委員会